

相良元貞（相良知安の弟）のドイツ医学留学の足跡

相良 隆弘

佐賀医学史研究会

筆者は相良元貞より5代目の子孫に当る。筆者は相良元貞がドイツへ医学留学した足跡を辿る旅を、平成26（2014）年7月に実現した。渡独の調査成果を報告すると共に、相良元貞が果たした日独医学交流の役割についても論究したい。相良元貞は、明治初期我が国へドイツ医学の導入に尽力した佐賀藩医相良知安の弟である。元貞は、天保12（1841）年佐賀藩医相良長美（柳庵）の四男として、佐賀城下八戸に生まれる。藩校弘道館に入学後藩医学校「好生館」へ進む。文久3（1863）年、江戸遊学を命じられ蘭医松本良順が主宰する「幕府医学所」に入門し蘭医学を学ぶ。その後慶応元（1865）年には、兄良知が学んだ下総佐倉の「佐倉順天堂塾」に入門し、蘭医佐藤尚中から蘭医学を学び会頭を務めながら、「ヒルトル解剖書」や「ストクハルト化学書」を朝から夕方まで講義した。明治2（1869）年、「大学東校」の中助教兼大寮長に就任。明治3（1870）年2月に「大阪医学校」へ転勤した後、同年12月に「明治政府第1回派遣留学生」（9名）の一員として、プロシア（ドイツ）のベルリン大学へ医学留学（病理学）した。

筆者は、フンボルト大学（旧ベルリン大学）文書館アーカイブを訪問し、元貞がベルリン大学へ在籍した「学籍登録者名簿」等を閲覧できた。ベルリンは第2次世界大戦で壊滅した首都だが、幸運にも史料は保存されていたのである。この史料からは、元貞が明治4年（1871）10月の冬学期から学籍登録している名簿には、①名前と出生地（国）②専攻と学籍登録期③現住所などが掲載されていた。さらに、元貞個人の登録者名簿を解読すると、①受講した医学の科目②受講年度③受講した教授名等が掲載されていた。当時のドイツ病理学の大家である、ウイルヒョウ教授から指導を受けている。教授陣には、ランゲンベック（ドイツ外科学の大家）、バルデレーベン（外科学）、デュボア・レエモン（生理学）、ライヘルト（解剖学）、フレーリヒス、トラウベ（ドイツ内科学の大家）、リープライヒ（薬理学）、ドーベ（実験物理学）、レウイン（皮膚科）などから指導を受けていた。元貞はベルリン大学で明治7年（1874）9月の夏学期まで在籍し、通算して6学期を修了した。同年10月にライプチヒ大学医学部へ転学し「学籍登録」した。学籍名簿からはドイツ内科学の権威で、ベルツの師匠であるブンダーリッヒ教授が指導教授である。他の教授からも指導を受けた。ドイツ滞在5年間に勉学に励み博士号取得を目指す。両都市での元貞の下宿番地も判明し現地を訪問し感激した。

しかし、臨床実習中に解剖メスで誤って自分の手指を傷つけ、そこから細菌に感染され肺病を患いライプチヒ大学附属病院へ入院する。そこで主治医のE.ベルツと出会う。日本人医学生の元貞と初めて出会ったベルツは、献身的に元貞を治療する。ベルツは、次第に元貞の故国である極東の国日本への興味と関心を抱き始める。元貞は、E.ベルツの懸命な介護と治療にも拘わらず好転せず、明治8年（1875）3月失意のうちにライプチヒ大学医学部を退学し、同年6月帰国。同年10月に東京にて35歳で死亡した。明治政府は、明治9（1876）1月にベルツ招聘を決定し、同年6月に日本に着任した。E.ベルツ博士は、東京大学医学部で26年間も生理学、内科学、産婦人科の教鞭をとり多くの医学生を指導し育成する。「日本近代医学の父」として日本医学の発展に貢献したベルツ博士は、来日する契機となった元貞との出会いと共に、日独医学交流の懸け橋の役割を果たした。今回の渡独で、ベルツの生家・墓所・資料館を訪問しベルツの足跡も調査できた。